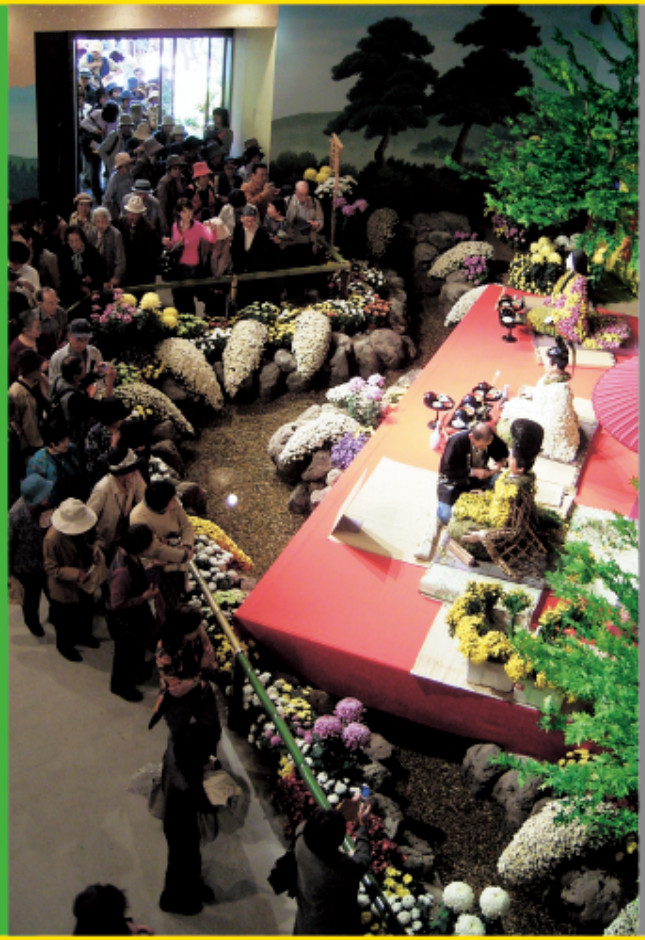
ひらかた菊人形今昔



菊人形の製作過程

胴殻

菊人形の骨格。

最初の巻藁。
常に前4本、後3本。

胴体の形成。衿の重なり方は特に重要。

胴体から腕へ。巻藁の位置は体得のみ。

腕から袖へ。袖の長さも時代考証。

打掛姿の胴殻完成。
着物を着ている状態。

菊付け

玉を胴殻に挿し込む順番、場所、茎を曲げる向き、縛る位置すべて決まっている。

胴体の完成。植物相手なので、状態は常に変わる。厳格に、かつ臨機応変に。

菊付けの完成。ひらかたの菊人形「義経」(2005年)の衣裳。男性らしさを表現。

金色堂の前に立つ藤原秀衡。頭や手足がついて菊人形の完成。

着せ替え

1999年ひらかたの菊人形「元禄瞰乱」一力茶屋の場の大星由良之助(9月22日)。

同じ場面。着せ替えによって、羽織と着物の色が入れ替わっている(10月5日)。

数度の着せ替えの後。旬の菊の変化が印象を変える(10月30日)。

一週間ごとに訪れてもそれぞれの菊人形が違った装いを見せてくれる(11月19日)。

菊人形では、菊という「不可能な素材」で着物をつくる。今とちがい、かつての人々は日常着として着物を着ていた。その知識は半端ではない。見物客が菊師の腕を批評できるのも楽しみのひとつだ。菊師は工夫する。精度が上がる。そのくりかえしが今日の菊師の高い技をつくりあげた。

胴殻に菊付けし、頭や手足などをつけて完成する。

胴殻：籠細工から工夫された胴殻の製作には巻藁が用いられる。竹を藁で包み糸で巻く作業によって頑丈になり、菊の傷みも軽減される。

「着物を着たヒトの形」をつくる。一体の胴殻に一日を要する。菊の重さにも耐えられるように、また衿の重なりや、身体の線まで緻密に表現されるようにつくられる。

菊付け：栽培師が菊人形専用の人形菊を一年かけて栽培する。根の付いたままの菊を2～3株ずつまとめ水苔で巻いて「玉」が準備される。胴殻に玉をさしこみ、茎が折れないよう「い草」で縛って菊の着物をつくりあげる。一体に必要な菊の量は40玉以上。ベテランの菊師でも一体に一日はかかる。そして玉のひとつひとつに毎日水やりを行う。それでも菊人形一体の寿命は長くて10日のため、「着せ替え」なければならない。

日本人は昔から「意表を突かれる」ことを楽しみとした。生きた植物を素材とするこの娯楽は、いつ訪れても同じ状態ということがない。リピーターを飽きさせることのない、奥の深い娯楽である。

いっぽう菊師にとって菊付けは生きた植物との闘いである。それぞれの菊の具合を見極めなければならない。菊付けが終わっても菊は開花して「動く」から、それも想定しなければならない。菊師はほかでもない「菊の衣裳」をつくっている。表面はなめらかに、まるで一枚の生地のように。ヒトが着物を「着た」状態を「生きた」植物でつくる。はっきり言ってムリなことである。菊人形という「娯楽」は、製作過程が複雑で困難だからこそ技に深まりが生まれ、見る楽しみが倍加するのである。

人形菊

ひらかたの菊人形の人形菊は、早生・中手・晩生と約80種類もあり、同じ種類でも畑によって微妙な違いがある。そのうえ完成後の水やりで開花するから、わずかの間に菊衣裳が変化するのを見ることができる。

◎発行：枚方市　市民生活部　生涯学習推進室　文化観光課　◎監修・文・資料(表紙、本頁及び●)：川井ゆう　◎デザイン：谷村満里子　◎編集協力・資料(●)：京阪電気鉄道株式会社／ひらかたパーク　◎制作：株式会社京阪エージェンシー　◎発行日：平成18年8月31日
資料(●)：山本高志　(●)：奥村フミ子　(●)：長谷川貞信（五世）　(●)：文京ふるさと歴史館　(●)：名古屋市博物館

欧米での評価

英国の園芸雑誌1889年11月16日号に掲載された、菊(CHRYSANTHEMUMS)の広告。この時代すでに菊と日本のイメージは結びついていた。●

左下と同じ２月号の科学雑誌に掲載。お茶を点てる場面との説明があり、燈籠も風情を演出している。●

ヨーロッパの人から見た菊人形。1890年２月号の科学雑誌に掲載。日本人には地味な場面だが、日本らしさにあふれている。●

1999年、米国ロングウッドガーデンにひらかたの菊人形の菊師が招待された。写真は、菊人形の説明を現地職員が行っているようす。●

菊人形の楽しみかた

法勝寺（鳥取県西伯郡）の一式飾りの一場面。漆器一式のタコである。江戸時代以来の見立て遊びが今日までつづいている。① ●

直江町（島根県飯川郡）の陶器一式でつくられた「吉良邸討ち入り」。平田市（島根県）など山陰地方に一式飾りの風習が残っている。③ ●

「お猿の駕籠屋」。掛合町（島根県飯石郡）は「一色」と書く。秋葉明神に奉納されるのは、直江と同じである。② ●

1935年のひらかたの菊人形の一場面。この年は歩いてたどる「見流し」28場面に、舞台が変わる15場面の「段返し」だった。④ ●

菊人形についての英文の記録はすでに江戸時代に存在する。たとえば1860年。植木屋の客寄せとしてつくられていた菊人形を「イミテーション・レディー」と呼び、団子坂（江戸）の植木市のなかでいちばん珍しいものと記した。それ以後多くの欧米人が菊人形のことを感動をもって記録している。

菊人形は日本にしかない独特のものであるが、欧米の人は江戸時代から、相撲や歌舞伎などと同じように注目している。

来日する外国人観光客のための英文の旅行案内書が東京を中心に書かれていた1933年、ひらかたの菊人形のことをみることができるのは、その知名度の高さを示す。「…これらのショーは日本の外では見られない、美しい花の優れた展示であり、それに加えてすばらしい教育的効果もある」。

戦後に書かれた英文の記録は、ひらかたの菊人形の記述が他の開催地を圧倒した。外国人にとっても「菊人形」といえば「ひらかた」だったといえる。

欧米人にとって見なれた西洋風の遊園地のなかに建てられた純日本式で大規模なひらかたの菊人形館。1958年の英字新聞では「もっとも珍しいフラワーショー」と評され、1963年の米国の庭園雑誌では、「写真家たちのパラダイス」と絶賛されている。1991年に米国で発行された『新しいトピアリー』という本には、ひらかたの菊人形の写真を掲載して菊人形が米国の菊栽培に影響を与えたと記されている。

誕生以来、欧米の多くの人々が、菊人形を見たいと欲した。1900年のパリ万博のころから日本の製作者を招待しようしたようだが、戦後になって、各国で実現した。ひらかたの菊人形は、1999年に米国のロングウッドガーデンで展示された。

菊人形は江戸時代に登場し、枚方での歴史も一世紀に近い。誕生から今日まで、欧米人をはじめとする外国人に絶賛され、影響を与えたのである。

19世紀。菊栽培、籠細工と活人形の見世物とが組みあわさって菊人形はできあがった。

菊栽培技術が発達して、菊人形専用の「人形菊」の栽培が可能となる。

籠細工の技術は菊人形の「胴殻」に生かされた。籠細工は頭の先から足の先まで籠という「一式飾り」の一種である。「陶器一式」や「漆器一式」などもあり、祭礼などで現在も飾られる。

活人形は、奇抜な「衣裳」も身につけた。吉浜細工人形や、せともの人形などの菊人形以外の「細工人形」は、奉納細工としてつくられる。

これらは「見立て細工」である。菊人形は、過去の「技術」を凝縮し、さらに「楽しみ方」を踏襲して「高度な見立て遊び」に昇華した。

見立て①：漆器一式のタコ。タコを知っていればすぐに理解できる。シンプルな見立てである。

見立て②：陶器一式のお猿の駕籠屋。「お猿の駕籠屋」の童謡を知らなければ、物心のついた人にしか本当には楽しめない。少し高度である。

見立て③：忠臣蔵の物語を知らないと、陶器一式の「吉良邸討ち入り」の場面は理解できない。年少の見物客には大人の解説を必要とする。

見立て④：菊人形などの細工人形。「安宅の関」だけではなく、弁慶に扮した昭和10年の松本幸四郎を知っていなければ楽しめない。厳密にいうと細工人形は同時代人にしか理解できない。

日本人は菊人形に特別の興行的価値を見出した。つつじなど他の「花人形」も試みられたが、「菊」人形がずっと主流だった。

外国人でも説明があれば②と③は理解可能だろうが、④となると、かなり困難であろう。だからこそ菊人形は面白い。一過性の楽しみを提供する現代の娯楽と対極をなす。日本人は100年以上の間、こんな菊人形を楽しんできたのである。

総合技芸

ひらかたの菊人形は、菊師、人形師、栽培師、大道具師、小道具師、美術装置師、照明技師など多くの専門的な技術が総動員された「総合技芸」である。

大道具師は興行が終わるとすべてを壊してゼロにする。ゼロにするからこそ、そしてニセモノだからこそ、あらゆる工夫が可能なのである。菊人形独自の舞台設計がそこにある。

美術装置師は桜の木を植えたその背景に、あえて花びらが舞った絵を描く。高度な筆致が菊人形展を豪華にする。画家の絵画のように残されることはなく、興行が終わればどんなに腕をふるった背景画もやはり処分されてしまう。

照明技師は、美しい菊人形の舞台をより美しく照らす。しかし菊が照明の熱で枯れてしまわないように工夫もされている。そして照明によって動けない菊人形に躍動感が与えられるのである。蛍光灯の下で見ればどんなに味気ないか。

菊師や人形師、栽培師や小道具師以外にも、さらに根巻きや水差しなど多種多様な作業があって初めて興行は成立する。

その年の秋の興行のためだけに、関係者たちは、あらゆる精緻な技術を用いて真剣勝負をしているのである。

2002年ひらかたの菊人形「醍醐の花見」の大舞台には、桜が描かれ、木が植えられている。美しい菊人形の周囲には満開の菊が飾られる。やさしい光に包まれた、静かな場面である。●

1936年ひらかたの菊人形「閻魔堂の仇討」。手前が等身大の菊人形。閻魔様の大迫力。●

1957年ひらかたの菊人形「大仏開眼」の場。室内にいることも忘れる巨大な菊人形館。●

1907～1911年頃の団子坂の菊人形場面。菊人形の原点。●

黄花園が東京進出を果たした後の両国国技館入口(1929年)。●

浅野菊楽園が岐阜で興行を行っていたころの菊人形。●

(上)ありし日の黄花園(戦前)。(下)黄花園の東京進出を伝える新聞広告(1910年)。

製作者の起源

専門家が集い、子から孫へ、師匠から弟子へと技が継承され、また新たにベテランが寄り、一部は自ら「地元の人」となる。このようにしてひらかたの菊人形展はつくられた。

まず東京・団子坂の菊人形展が全国に知れ渡った。興行化は明治9年。明治20年代から興行をはじめた名古屋の黄花園は規模拡大の過程で、菊師を吉浜地方（現愛知県高浜市）から招いている。明治38年に大阪の甎菊庵の興行に黄花園が加わったとき、そこには東京の人形師や菊師、大阪の絵師や菊師もいた。翌年には大阪と神戸への進出に成功。さらに、明治42年の東京では両国国技館の興行が団子坂を廃業に追いこむ。黄花園が全国に菊人形を知らしめ、それを定着に導いたのが岐阜の浅野菊楽園である。このようにして菊人形興行には団子坂、名古屋、吉浜、岐阜、大阪、京都の製作者が深くかかわるのである。

ひらかたの菊人形は明治43年には黄花園が、翌年は浅野菊楽園が引き継ぐ。宇治から枚方に戻るときには堺大浜の製作者も合流、昭和3年の菊人形館の大改築、また他の菊人形屋の廃業などの結果、専門家が続々と枚方に集結し、職人技の粋がここに華開いたのである。

伝統的舞台

たとえば人形浄瑠璃。三味線に合わせて太夫が語り、人形遣いが人形を動かす。人形遣いは名人になると、堂々と顔を見せて操っている。人形のセリフは、人形からではなく太夫の口から聞こえてくる。日本人には見慣れた情景だが、欧米の人は驚くことが多いのだという。欧米の舞台との決定的な違いのひとつは、日本の伝統的舞台が「舞台裏」を見せて喜ばれる点にある。人形とともに、人形遣いの表情を見ることも楽しみのひとつだ。江戸時代に誕生した菊人形の舞台では、菊師が見物客に背を向けて、菊付け作業を披露する。100年を越える歴史のあいだ、ずっと見せ続けている。菊師は背中でその日の入場者数を感じるそうだ。裏方の仕事だからと菊付けを見せないのは、近年にはじまった一部の菊人形展だけである。実際、見物客は菊付け作業に居合わせて幸運だったという声をよく耳にする。人形浄瑠璃に人形遣い、菊人形に菊師。彼らが舞台に「居る」ことで、日本の伝統的舞台が完成する。

船上で着せ替えを行っているのは菊師の平野貞夫さん。菊師歴50年を越える大ベテランである(2005年)。●

どんな場面も取り込める菊人形。文楽の場面がつくられると人形遣いも菊人形になる(1962年)。●

菊師の鈴木清春さん。視線を浴び、フラッシュを浴び、照明を浴びながらも黙々と作業する(2005年)。●

ひらかたの菊人形「勝海舟」の菊付け(1974年)。菊師のハッピが時代を表す。●

菊人形年表

菊人形は、19世紀の江戸時代にはじまり、明治時代に興行化し、大正、昭和、平成と経て21世紀にまでつづいてきた。
日本じゅうにある菊人形開催地のなかで、枚方は明治から平成まで、ほぼ中断なく続いてきたという、他にはないすばらしい歴史をもつ。
本年表では菊人形の起源から2005年まで、枚方の菊人形を幹として、関西に焦点をあてて歴史をふりかえる。

■江戸時代■

菊細工

百種接分菊、歌川国芳の描いた浮世絵（文京ふるさと歴史館蔵）。一本の幹に接木して百種類の花を咲かせたもの。江戸時代に歌舞の間に登及した菊栽培は、またたくまに高歩した。栽培家たちのなかには珍しい菊の栽培を試みる者も多かった。

籠細工

文政年間(1818-1830)に流行した籠細工の見世物の「象」。『絵本浅草文庫』初編に掲載されている（名古屋市博物館資料叢書３）。巨大なものが居しがられた。やがて巨大な細工から等身大の模作など人工人見物の興心は移っていく。

菊人形の造形の誕生

柴錦唱、龍細工、等身大人形の技があわさって菊人形が誕生した。天保15(1844)年、巣鴨（江戸）の露語絵の会式に飾られたかがい、写真は1952年のからたの「お国自慢三十場面」の菊人形。神まですべてが菊で表現されている。

活人形（いきにんぎょう）

「俳優似顔活人形」番付。等身大人形の見世物は、天保年間(1830-1844)から注目される。人形師は「まるで生きているような」人形をつくりあげ、安政年間(1854-1860)には「活人形」という呼称が登場した。現代の菊人形の人形師は彼らの弟子たちである。

1876

■明治時代■

菊人形の興行化

明治9(1876)年、団子坂（東京）周辺では、東京府の許可を得て菊人形を興行化する、菊見料3銭だった。それだけ菊人形は日本人にとって楽しい娯楽だった。は来すっと菊人形は日本人の目を楽しませ続けている。写真は団子坂と推定される菊人形の一場面。

■関西の主な開催地

- 獅菊庵
- 福島園
- 神戸貿花園
- 鳴尾百花園
- 五階下貿花園
- 住吉菊花園
- 長野遊園
- 西宮香櫨園
- 京都菊乗園

獅菊庵

団子坂で興行化して数年後には駅舎風だけではなく、大阪市内各地で開催され、さらに関西一円で盛んとなる。写真は「上方」第70号（1936年10月1日発行）の表紙に掲載された長谷川貞信の画。

1910

春里遊園地

阪神電車の西宮香櫨園、南海電車の住吉菊花園、高野登山鉄道の高野遊園などが新聞興行の一環として菊人形展を催し、京阪電車も続いた。一世紀に亀之原歴史のはじまりである。写真は「小梅公園」の絵はがき。

1912

枚方遊園地

3年目から会場は枚方へ移る。写真の絵はがきには「枚方遊園地活動写真館菊人形大田道灌山物之屋」と記されている。「菊人形といえば枚方」がここにはじまる。

1919

宇治菊花園

枚方の会場はいったん平治に移る。写真の絵はがきは宇治駅花園の正門入り口。4年の間に、宿花園が大正に建い、継続は不可能となり、翌年から再び枚方で行われる。

1923

ひらかた

平治や大浜のイラストの製作者たちが枚方に集う結果となった。写真は大正15(1926)年に販売された菊人形のパンフレット。

1939

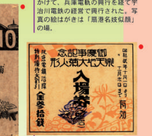
■大正時代■

塚大浜

南海電車が力を入れた、南国園技術の興行をしていた為経奏資が移ばれたんまりふるわず、大浜のペラクシの製作者は枚方に始めることとなった(大正6年～大正11年)。写真の絵はがきは「通夜物語」の場。

千日菊乗天地

大正末期から昭和のはじめにかけて興行された。写真は昭和2年の入場券。



瑞豊寺遊園地

大正時代後半から昭和のはじめにかけて、兵庫電鉄の興行を続て宇治川電鉄の経営で興行された。写真の絵はがきは「蓮華長柿伝説」の場。

大阪国技館

明治44年から京阪の興行を引き継いでいた浅野菊楽園は宇治時代にいったん手を引き、大阪の新世界の国技館で敢年間、菊人形興行を行った。写真は、絵はがきの入っていた封筒。

■昭和時代■

神戸みなとの祭

1年だけのイベントにも菊人形は利用される。写真は神戸市民祭協会の発行した菊人形パンフレット。郷土神戸の史跡、伝説を世に紹介する意図をもって菊人形館を設けたと説明されている（1934年）。

役者

1948年に第1回目の菊人形展が開催された。第6会場まである規模の大きさだった。製作陣には枚方ペラクシが起用された。写真は1949年のパンフレット。

千里山

いつかまた枚方の地で菊人形展が催せるようにと、菊の種苗や、人形部品、舞台装置の道具などが千里山遊園に保管された。ひらかたの菊人形が千里山に復活した。写真は1948年の招待券。

明石公園

須磨寺遊園地の復活の意味をこめられて興行されたのが明石公園の菊人形展。山陽電車の関係である。明石でも枚方の製作者が参加している。写真は1959年のパンフレット。

1949 1968

ひらかた

千里山で継続されていた「ひらかた」の菊人形は1949年に本来の開催地に戻った。写真は「鶴当」の場の絵はがき。

阪神パーク

阪神石線では昭和のはじめに甲子園で菊人形展が開かれた記録があるが、阪神パークでは1956年にはじまった。写真のチラシは1973年のものと思われる。

1956 1983

あやめ池

奈良では、昭和初期に当麻寺において大阪による菊人形展があった。あやめ池遊園地では1954年にはじまり、近鉄沿線でも菊人形とOSKの「秋のおどり」を観ることができた。写真は1970年のパンフレット。

1954 1987

ひらかた

1968

1973

姫路城

姫路城では昭和30年代、40年代に菊人形展が開かれた。写真は1960年のパンフレット。

■平成時代■

御堂筋パレード

御堂筋パレードでは何度かひらかたパークのフロートに菊人形が飾られている。たった1日のイベントでも菊人形は人々の目を引くディスプレイである。写真は1993年10月10日のパレード。

1996

2003

2005

■ひらかた菊人形年表　＊金額は入場料、人数は来場者数

明治	第1回	1910年	見流し5場面「雪月花」3段返し 往復乗車券待参の方は入園無料
	第2回	1911年	6場面、「忠臣蔵」5段返し、無料
大正	第3回	1912年	● 5段返し、5銭、295,957人
	第4回	1913年	● 7段返し、3銭、237,749人
	第5回	1914年	● 11場面、7段返し、8銭、201,981人
	第6回	1915年	● 11場面、7段返し、10銭、167,340人
	第7回	1916年	● 18場面、10銭、225,494人
	第8回	1917年	
	第9回	1918年	● 8場面、9段返し、15銭
	第10回	1919年	● 9段返し、30銭
	第11回	1920年	
	第12回	1921年	● 17場面
	第13回	1922年	
	第14回	1923年	● 15場面、「雪月花」12段返し、40銭
	第15回	1924年	● 15場面、「雪月花」12段返し、40銭
	第16回	1925年	● 12場面、10段返し、40銭
	第17回	1926年	● 16場面、7段返し、50銭、255,957人
昭和	第18回	1927年	● 11場面、「仮名手本忠臣蔵」14段返し、40銭、205,170人
	第19回	1928年	● 19場面、14段返し、50銭、139,395人
	第20回	1929年	● 20場面、「太閤記」12段返し、50銭、193,065人
	第21回	1930年	● 20場面、「忠臣蔵」12段返し、50銭、206,162人
	第22回	1931年	● 20場面、「雪月花」15段返し、50銭、201,254人
	第23回	1932年	● 25場面、「国威発揚」12段返し、35銭、208,342人
	第24回	1933年	● 28場面、「上方情緒」15段返し、50銭、257,468人
	第25回	1934年	● 29場面、「菊レビュー百華百色」15段返し、50銭、284,463人
	第26回	1935年	● 28場面、「歌舞伎絵巻」15段返し、50銭、333,989人
	第27回	1936年	● 25場面、「菊模様四季の色彩」15段返し、50銭、372,522人
	第28回	1937年	● 30場面、「輝く聖花」15段返し、50銭、317,660人
	第29回	1938年	● 28場面、「支那事変聖戦忠勇武烈」15段返し、55銭、433,474人。
	第30回	1939年	● 30場面、「忠孝菊花」15段返し、55銭、564,436人
	第31回	1940年	● 30場面、15段返し、55銭、644,638人
	第32回	1941年	● 30場面、「忠臣蔵」15段返し、55銭、677,910人
	第33回	1942年	● 30場面、「関南太閤記」15段返し、65銭、729,996人
	第34回	1943年	● 30場面、「七生報国大楠公」15段返し、70銭、669,572人
		1944年	
		1945年	
	第35回	1946年	● 12場面、5円、239,705人
	第36回	1947年	● 16場面、20円
	第37回	1948年	● 13場面、50円
	第38回	1949年	● 19場面、12段返し、80円、350,178人
	第39回	1950年	● 23場面、「菊のカーニヴァル」15段返し、80円、362,469人
	第40回	1951年	● 22場面、「忠臣蔵」15段返し、80円、499,242人
	第41回	1952年	● 21場面、「義経絵巻」15段返し、100円、502,039人
	第42回	1953年	● 「古今文豪名作」25場面、「出世太閤記」15段返し、100円、564,175人
	第43回	1954年	● 「新・平家物語」25場面、「菊おどり大江山鬼退治」15段返し、120円、565,505人
	第44回	1955年	● 「古今演劇名舞台アルバム」30場面、「浦島太郎」15段返し、120円、604,924人
	第45回	1956年	● 「義経絵巻」22場面、「西遊記孫悟空」15段返し、120円、531,558人
	第46回	1957年	● 30場面、「新版かぐや姫」15段返し、130円、582,884人
	第47回	1958年	● 「大坂城物語」30場面、「道成寺絵巻(O.S.K.)」15段返し、130円、534,968人
	第48回	1959年	● 「浮世絵風俗絵巻」32場面、「絵姿民謡道中(O.S.K.)」15段返し、130円、622,469人
	第49回	1960年	● 「名作絵巻物語」22場面、「大江山酒呑天童子(O.S.K.)」15段返し、150円、606,695人
	第50回	1961年	● 「中国物語絵巻」25場面、「世界平和まつり(O.S.K.)」15段返し、150円、562,843人
	第51回	1962年	● 「お国自慢」30場面、「日本八景(O.S.K.)」15段返し、150円、665,370人
	第52回	1963年	● 「お祭り百景」30場面、名物15段返し「秋のおどり」150円、751,041人
	第53回	1964年	● 「赤穂浪士」30場面、名物15段返し「秋のおどり」180円、788,581人
	第54回	1965年	● 「王将一代」30場面、名物15段返し「秋のおどり」200円、717,529人
	第55回	1966年	● 「江戸」32場面、名物15段返し「秋のおどり」200円、685,268人
	第56回	1967年	● 「宮沢一声」30場面、(段返し館焼失)200円、664,672人
	第57回	1968年	● 「ふるさとの祭」30場面、230円、669,302人
	第58回	1969年	● 「天と地と」30場面、260円、748,643人
	第59回	1970年	● 「古都絵巻」33場面、300円、796,843人
	第60回	1971年	● 「天皇の世紀」25場面、350円、786,969人
	第61回	1972年	● 「新・平家物語」31場面、380円、832,901人
	第62回	1973年	● 「東海道」33場面、400円、813,426人
	第63回	1974年	● 「勝海舟」31場面、550円、848,877人
	第64回	1975年	● 「にっぽんの祭り」37場面、700円、674,735人
	第65回	1976年	● 「伝統65年名作絵巻」30場面、700円、698,836人
	第66回	1977年	● 「花神」30場面、700円、700,002人
	第67回	1978年	● 「太閤秀吉」30場面、800円、695,302人
	第68回	1979年	● 「源義経」30場面、800円、654,748人
	第69回	1980年	● 「西遊記」30場面、900円、675,437人
	第70回	1981年	● 「おんな太閤記」30場面、900円、695,117人
	第71回	1982年	● 「忠臣蔵絵巻」30場面、1,000円、694,300人
	第72回	1983年	● 「浪華」30場面、1,000円、504,719人
	第73回	1984年	● 「宮本武蔵」36場面、1,000円、594,399人
	第74回	1985年	● 「真田太平記」26場面、1,000円、513,523人
	第75回	1986年	● 「武蔵坊弁慶」17場面、5段返し(第13～17場面)1,200円、529,902人
	第76回	1987年	● 「独眼竜政宗」22場面、1,200円、549,659人
	第77回	1988年	● 「武田信玄」18場面、1,200円、548,935人
平成	第78回	1989年	● 「春日局」11場面、1,200円、613,449人
	第79回	1990年	● 「瑠璃が如く」13場面、1,200円、501,262人
	第80回	1991年	● 「太平記」12場面、1,300円、589,560人
	第81回	1992年	● 「信長」12場面、1,300円、573,190人
	第82回	1993年	● 「炎立つ」10場面、「義経絵巻」12段返し1,300円、495,566人
	第83回	1994年	● 「花の乱」10場面、「日野富子の生涯」8段返し1,300円、515,636人
	第84回	1995年	● 「八代将軍吉宗」11場面、1,300円、503,192人
	第85回	1996年	● 「秀吉」10場面、1,600円(セット料金)、522,125人
	第86回	1997年	● 「毛利元就」9場面、1,600円、472,925人
	第87回	1998年	● 「徳川慶喜」9場面、1,600円、403,405人
	第88回	1999年	● 「元禄繚乱」9場面、3段返し（第4場面）1,600円、413,251人
	第89回	2000年	● 「葵」9場面、1,600円、365,247人
	第90回	2001年	● 「源氏物語」10場面、1,600円、413,524人
	第91回	2002年	● 「利家とまつ」9場面、1,600円、352,768人
	第92回	2003年	● 「武蔵」9場面、1,600円、357,315人
	第93回	2004年	● 「新選組」9場面、1,600円、353,823人
	第94回	2005年	● 「義経」9場面、1,600円、692,775人

「ひらかた」の菊師の技

毎秋、三河から枚方に来て厨殿をつくり、菊付けの技を披露してくれる菊師たち。その技は、枚方市や京阪電鉄から表彰されているだけではなく、大阪府中国によっても認められている。1999年、当時頭領だった故村瀬稔之氏は卓越技能者として表彰された。「現代の名工」に選ばれたのである。日本じゅうで菊人形は製作されているが、「ひらかた」の菊師たちへの評価はとりわけ高い。

2003年11月21日平野貞夫氏の「なにわの名工」受章祝賀会

2005年11月16日鈴木清春氏の「なにわの名工」受章祝賀会

大阪府技能奨励賞（通称「なにわの名工」）のメダル